

# 明治の西洋動物学の黎明 II

## ——木下熊雄とそのグローバル性の背景

松本 亜沙子

### 目次

- 一 木下熊雄とその世界
- 二 伊倉―船と湊―
- 三 刀の時代・鉄砲の時代
- 四 木下家の人々
- 五 木下熊雄のグローバル性

#### 一 木下熊雄とその世界

本稿は、明治の海洋動物学者・木下熊雄のグローバル性の背景について熊本県玉名市伊倉という町及び父祖の菊池という地を中心に現在明らかになった点を纏めたものである。

木下熊雄は熊本県玉名市伊倉出身、明治三六年（一九〇三）から大正三年（一九一四）の間、帝國大学（現・東京大学）理学部動物学教室に在籍し、大正元年（一九一〇）に深海・冷水域の開放サンゴ類研究で博士号を取得した海洋動物学者である（図1(a)）。在籍中に二六本の日本語論文と報告文、八本のドイツ語論文、二本の英語論文を書いている（詳細については松本二〇一一参照）。

郷土史家や伝記作家など文系からの視点ではなく、科学者であり海洋生物学者である私の視点から木下家及び伊倉の地を俯瞰するというのは一見分野違いのことのように思えるかもしれないが、伊倉・木下家から、海洋動物学（木下熊雄）、物理学（木下

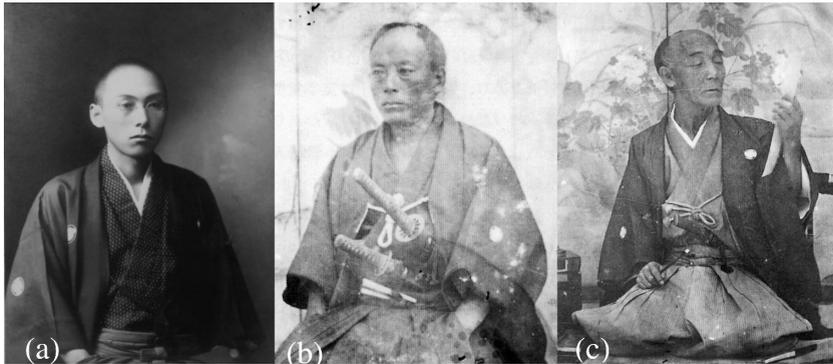


図1 (a) 木下熊雄 米スミソニアン自然史博物館 F. M. Bayer 氏所蔵 (筆者複写)、(b) 熊雄の父・木下助之 玉名市歴史博物館、(c) 熊雄の祖父・木下初太郎 玉名市歴史博物館

秀吉・熊雄の兄)、天文学(木下国助・熊雄の甥)、農学(木下弥八郎・熊雄の腹違い兄・木下順二の父)、と連続して理系の科学者が輩出されていること、また、木下熊雄を輩出した有明海沿岸の伊倉という土地が、船や湊に関係が非常に高いことを考えると、この視点からの分析は一つの新しいアプローチと言える(表1)。また、熊雄の父の助之、祖父の初太郎のこうした記録から、当時の惣庄屋の科学的・技術的な側面も伺うことが出来る。表1からは、木下家の非常に複雑な家系図から、当時の熊本惣庄屋層のネットワークが見てとれる。司馬遼太郎が「街道をゆく」の肥薩のみちの中で、細川家の当主の細川護貞氏から聞いた話として「肥薩は難国(おさめにくい国)」ということで慎重に心くばりをした、という逸話をひいているが、加藤清正の前に肥後統治に失敗した佐々成政をはじめとする他所者<sup>よそもの</sup>支配者を悩ませたのもこうした肥後地主―地侍団同士のネットワークにもとづくものであったことが想像できる。

#### 1 木下助之日記・後年要録

木下熊雄の父、木下助之(玉名郡内田手永及び南関手永惣庄屋・細川藩会計局主計・熊本県議會議長・玉名郡長・第一回帝国議會議衆議院議員、図1(b))の残した日記類に「文政一二年丑正月

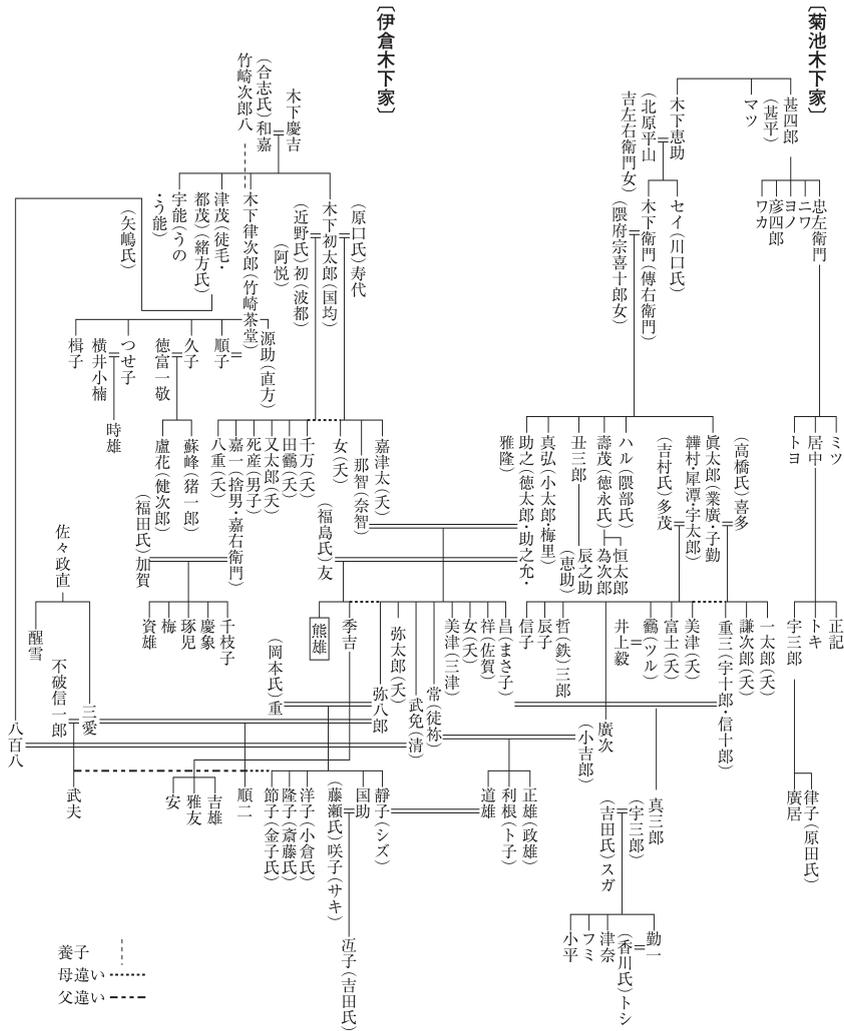


表1 木下家家系図 (2012改)

「後年要録」(玉名市史資料篇第5 古文書1993)をもとに、「熊本木下家系」・「墓碑銘」などを参照し、木下トシ氏からの聞き取りを加えて作成した犬童2000の家系図を中心に、木下2009、不破2008、「木下家と玉名」のデータを加えて、木下熊雄を中心に筆者が再構成した家系図(松本2001)を、吉田正憲氏、冨子氏(家系図中)からの聞き取り(pers.comm.2011.11.12)及び木下助之日記(一)(二)(玉名市立歴史博物館ころびア資料集成第四集2001、第五集2008)、木下順二展(玉名市立歴史博物館ころびア1995)をもとに加筆修正した。

「後年要録」、「嘉永三年正月 後年要録」「木下助之日記」がある。「文政二二年丑正月 後年要録（以下「文政一二・後年要録」）」は木下助之が書いているが、もともとは養父木下初太郎（中富手永・南関手永・坂下手永惣庄屋、図1(c)）の日記を後年纏めたものである（「玉名市史資料篇5古文書」一九九三）。「嘉永三年正月後年要録（以下「嘉永三・後年要録」）」は木下雅隆（助之）の名が記されている。木下助之の日記は、嘉永元年（一八四八）—嘉永八年（一八五五）の日記は「木下助之日記（一）」、安政三年—慶応元年の日記は「木下助之日記（二）」で玉名市立歴史博物館（以下「館」）から編集刊行されている（玉名市立歴史博物館ころピア資料集成第四集二〇〇一、第五集二〇〇八）。これ以降の日記は、熊本県立図書館所蔵木下文庫に収められている木下助之関係の日記類の原文を改めて確認する必要があるが、これは将来的な仕事になると思われる。

木下熊雄の名前が「文政一二・後年要録」に出てくるのは二回、「嘉永三・後年要録」に出てくるのは一回である。誕生、及び病氣関連であるが、これは兄の秀吉と同じ回数である。一つは助之が玉名郡長となった明治二三年（一八八〇）の翌年、「明治一四年（一八八一）巳年（初太郎七八歳）五月二四日午前五時、三男誕生 出生名・又彦、追って改名・熊雄」、そして二つ目は

「明治一八年（一八八五）乙酉年（初太郎八〇歳）一月二三日に助之の長男・弥八郎が麻疹に伝染、引き続き次男・秀吉、三男・熊雄も伝染した」とある。熊雄の母・（福島氏）友が世を去ったのは明治二四年、その五年後、助之は明治二九年七月一七日に弥八郎・秀吉・熊雄の三名に財産分与之標準の遺産状を残している（家関係資料<sup>133</sup>）。父・助之を亡くしたのが明治三二年（一八九九）一月三日、熊雄一九歳の時である。熊本中学済々黌（現・熊本県立済々黌高等学校）から旧制熊本第五高等学校に在籍の頃であり、高等学校の途中で熊雄は専攻を医学から動物学に変える。木下助之の年譜（玉名市立歴史博物館ころピア資料集成第四集二〇〇一）では助之は享年七八歳になっているが、「熊本県玉名郡誌」では享年七五歳になっており、伊倉の木下家墓地にある助之の墓碑銘に没七五歳とあり、また、生年没年からの年齢計算ともあうので七五歳が正確なところである。

## 2 手永と惣庄屋

前述の通り、木下熊雄の父・助之は内田手永及び南関手永の惣庄屋、祖父・初太郎は中富手永、南関手永、坂下手永の惣庄屋を勤めた。

本稿中に出てくる手永とは肥後熊本藩における地方支配の単位

で、一郡をいくつかの数の手永に分けるものである。伊倉の属する玉名郡の場合は、坂下・小田・内田・南関・中富・荒尾の六手永から成る。それぞれの手永は三〇―六〇村を区轄としていて村ごとに庄屋が登用され、更にそれを統括する惣庄屋の居宅を手永会所として、会所役人（手代・下代・小頭・走番）が勤務して、徴税・民政事務に当たっていた。手永内の村高・戸数・人数・牛馬・税額・商札・職札・舟数などをすべて記録した手永手鑑がそれぞれの手永で残っている（松本一九九二）。

玉名郡の時代による分け方は以下のとおりである。

戦国時代（一四六七―一五七二）―加藤清正の安土桃山時代（一五七三―一六二四）にかけて、一郷・八荘・山北郷、伊倉・大野・野原・白間・玉名・東郷・江田・千田、そのうち伊倉荘には二九村・立山・桃田・阪門田・伊倉南方・櫻井・片諏訪・宮原・野部田・竹崎・尾田・部田見・立花・青野へ九村附伊倉南方・小天・横島・伊倉北方・中北張・東北張・西北張・横田・大園・北牟田・河島・寺田・向津留へ九村附伊倉北方・小野尻・小島・濱村・千田河原、であった。

江戸時代、寛永一〇年（一六三三）細川氏の時代に、郷・荘を廃止し、小田・内田・坂下・荒尾・南関・中富の六手永となる。現在の伊倉町にあたる部分は小田手永に含まれている。小田

手永は三四村（西安寺・白木・上白木・原倉・二俣・立山・桃田・坂門田・伊倉南方・櫻井・片諏訪・宮原・野部田・竹崎・尾田・部田見・立花・青野・小天・横島・伊倉北方・中北張・東北張・西北張・横田・大園・北牟田・小島・濱村・千田河原・河島・寺田・向津留・小野尻）を管轄していた（肥後国玉名郡誌〔浄書本〕一八八三）。木下熊雄の在任していたのは伊倉南方になる。

約一〇〇年後の享保一三年（一七二八）年新編 肥後国志草稿（抄）では、玉名郡には三郷・六庄あり、それを前述の六手永の管轄で統治していたことが述べられている（成瀬久敬一七二八）。図2に伊倉町の含まれる小田手永と、伊倉町の小田会所、及び隣接する内田手永、坂下手永を示す。「伊倉町」は小田手永の「会所町」として、経在的中心地「在町」として繁栄していた（吉田二〇〇五）。

初期の惣庄屋は、百名余いたといわれ、旧土豪などの各地域の有力者が惣庄屋に登用され、世襲し、地方行政を担当していた。文化・文政期（一八〇四―一八二九）頃からは、加藤清正の旧臣や、清正が任命した大庄屋、小西氏・大友氏・島津氏の旧臣などの御家人からも登用された。

木下家では、熊雄の祖父・初太郎が、中富手永（天保八年（一



図2 現在の伊倉周辺地図と干拓地 及び湊関係施設位置図 (玉名市歴史資料集成第一集 高瀬湊関係歴史資料調査報告書 (一) 第一図2より)「この地図は国土地理院発行の1/50,000 (荒尾・玉名・山鹿)を使用したものである」  
伊倉町は右下の小田手永に含まれ、図中15に、伊倉町の会所である小田会所がある。

八〇

八三七) 九・二二―天保二年(一八四二)  
 一一・一五)、南関手永(天保二年(一八  
 四二) 一一・一五―万延元年(一八六〇)  
 九・三)、坂下手永(万延元年(一八六〇)  
 九・三―明治三年(一八七〇) 七・五)、熊  
 雄の父・助之が内田手永(慶応三年(一八六  
 七) 九・二三―明治元年(一八六八) 一一・  
 一〇)、南関手永(明治元年(一八六八) 一  
 一・一〇―明治二年(一八六九) 二・一)の  
 惣庄屋を歴任した(木下順二展一九九五、城  
 後二〇〇五)。  
 木下初太郎・助之の時代の惣庄屋は居住す  
 る手永ではなくそれぞれ各手永を担当するよ  
 う登用されるものであり、複数の手永の担当  
 を移っていくものになっていた。また惣庄屋  
 支配の寺も存在していた。例えば伊倉でい  
 えば来光寺、木下家菩提寺の光専寺、妙興寺、  
 顕松寺、法光寺などである(成瀬一七二八)。  
 木下家は、玉名郡六手永中自身の居住する小  
 田手永をのぞいた四手永の惣庄屋として登用

され、また残りの二手永に關しても様々な方面から關わっている。熊本を治めるにあたり決して無視できない役割をはたしている家であった。実際、明治維新（一八六八）の後、惣庄屋は解体されたがそれは明治三年（一八七〇）のことであり、更に明治二年（一八七九）には郡長制度が設けられ、再び惣庄屋などから郡長が登用されたのであった（熊本県玉名郡誌一九二三）。木下助之は、玉名郡の二代目の郡長を勤めている。

## 二 伊倉—船と湊—

木下熊雄のグローバル性の背景について、一つ目は、生まれ育ち、最期まで住んでいた熊本県玉名郡伊倉の地の立地をのべる必要がある。

伊倉は日本の多くの地方都市とはかなり異なる特徴を持っていた。

玉名・伊倉沿岸と有明海を挟んで向こう岸は雲仙である。左角を曲がると有明海を抜けて天草である。関東では浦賀水道を隔れた三崎と内房の關係に近いように思えるが、実際には浦賀水道の流れの速さと危険さから、有明海とは異なる重大な相違点がある。海流である。有明海は潮の干満は大きいが、浦賀水道のよう

な危険な難所ではなく、古来より出入り及び移動に船舶を利用するのが一般的であった。

### 1 船による移動

伊倉木下家も江戸時代から主に船舶での移動をしていたことが記録から明らかである。「文政二一・後年要録」における船舶の軌跡を抜粋する。嘉永七年（一八五四）秋（八一九月）、木下助之が長崎遊覧、西洋炮製作用方研究などに長崎遊覧をした際の記録は以下の通りである。

八月二三日宿元出立出府、八月二五日願いの手数相殺直に八月二五日夜大浜坂本七郎宅に宗匠春秋庵と同宿、二六日長洲町着、同伴木下小太郎・春秋庵同人姪鬻保ならびに下代福田冬蔵・三串和右衛門・清田善蔵僕 喜代次・定夫嘉兵衛 都合上下八人暮頃より発船、二七日朝肥前国大多尾村オホノより上陸、二八日朝崎陽に着、九月一日同所出立同夕入日諫早より乗船、一日朝長洲に着岸同日昼過ぎ帰着なり（「文政二一後年要録」）

これを見ると往路は木下家の居住していた伊倉からまず菊池川同・左岸の大浜（図3下部左側）經由で対岸の長洲に向い、長崎

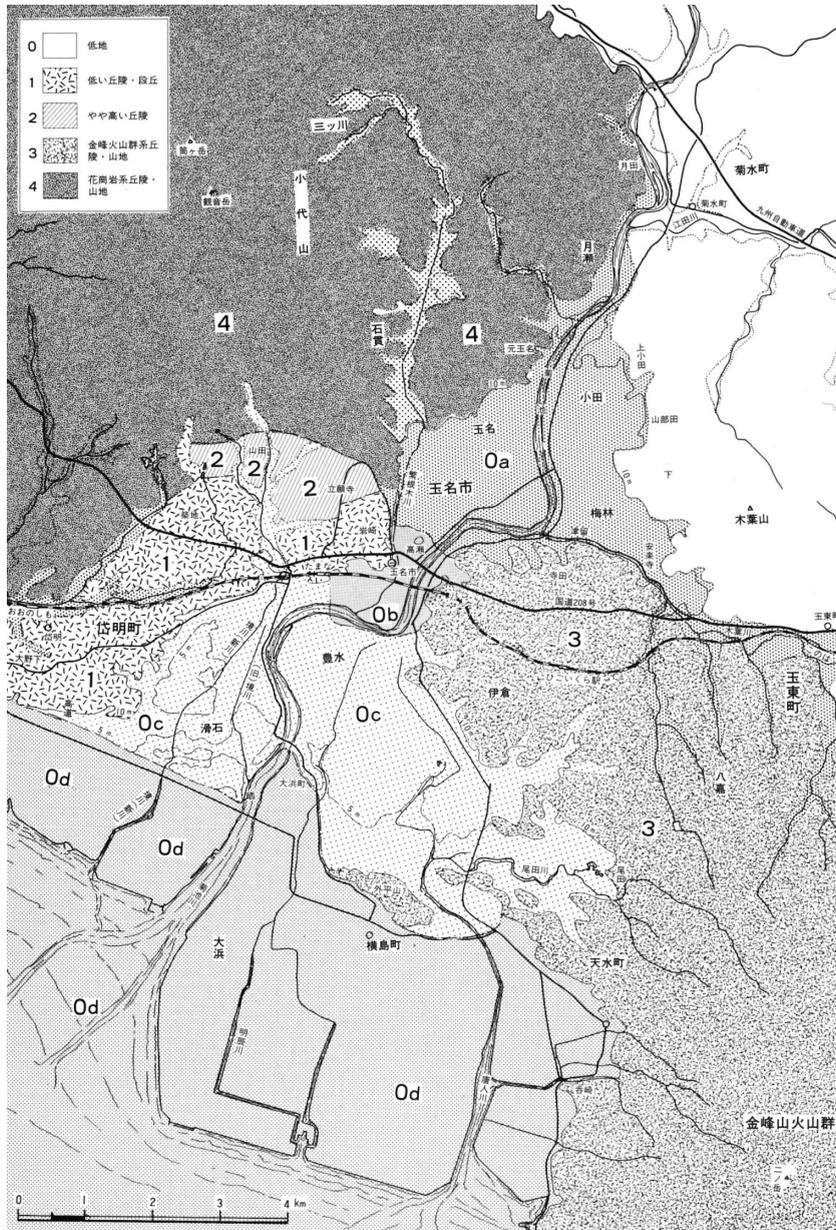


図3 玉名地域地理的地史的区分図 (玉名市歴史資料集成第六集 菊池川下流域遺跡詳細分布調査事業報告書(1)第1図) 伊倉：図中央右側、3地帯・金峰火山群系丘陵・山地。大浜：図下部左側、菊池川河口0d地帯。長洲：図外左側。

行きの船は夕暮頃に長洲から出港し有明海を抜け、長崎港内の西泊御番所近くの大田尾御台場から翌朝上陸し、陸路で長崎県長崎市内の崎陽に一日かけて移動している。大多尾という地名は天草に大多尾港があるが、ここは長崎港内の大田尾と思われる。一方帰路は、長崎市内崎陽から同日中に有明海側の諫早に、夕方には出港して有明海を横断して長洲に翌朝着いている。

七年後に長崎に行復した記録が残っている。

文久元年（一八六一）九月 木下助之允、村上亥久馬・池部彦之允・木村靄雄 長崎遊覧、一八日此許を立、一〇月四日帰着。  
〔文政一二後年要録〕

この長崎遊覧時は助之本人の記録として「文久元年一〇月 長崎見聞録 機濃志多」が木下順二寄贈木下家文書 草稿<sup>236</sup>として残されている。機濃志多というのは木下の当て字である。往路も直接長崎に渡るのではなく、有明海を横断して諫早經由で陸路長崎に赴くこともあったようである。

明治五年には長洲―諫早航路の記録がある。

明治五年（一八七二）七月 木下徳太郎（助之）東京府より依召

上京、七月一五日発 途一六日長須発船で諫早に渡り、一八日長崎発の船 メリケン飛脚船に乗り込む。〔文政一二後年要録〕

これらの有明海横断に使用しているのは、かかっている時間から推察して櫓こぎまたは帆の小さい和船と思われる。和船は実際に人間が乗った時には洋船に比べて船体が重く、多少の波では揺れないと言われる（三陸河北新報社二〇一一）。よって、有明海などの内海の良航路では木下家の利用のように小型船舶中泊も十分可能だったと思われる。またメリケン飛脚船とは飛脚のため、発着の時日を定めて往復した船（広辞苑 第四版）のアメリカ製の船と思われる。

明治になると次の記録にもあるように蒸気船も用いられるようになっていた。

明治六年（一八七三）三月 お初、お友、弥八郎を連れて東京行、乳母共に、三月一〇日 首途 高橋にて 竹崎茶堂夫婦と出会、三月一一日暮頃 小蒸気船舞鶴丸に乗り込み、三月一二日肥前島原原口津に船懸の内 茶堂病氣に付き上陸、一六日迄滞  
二二日 長崎より米国飛脚船エリエル船に乗り込む、二四日 神戸に着 上陸。大坂・京都より近江・美濃を経て東海道陸行、四

月二九日横浜より東京助之寓居に着、八月一日に同所出立、八月二日飛脚船ヲレコニヤ乗船、八月六日長崎着、長崎より百貫石迄は小蒸気野母丸乗船也、八月一日帰着、お友・弥八郎・乳母東京に残置、予夫婦帰国。〔文政一二後年要録〕

長崎への航路は、それ故長洲―大田尾御台場、長洲―諫早、熊本坪井川沿の高橋（熊本市）經由で、おそらく河口―島原原口津―長崎、長崎―百貫石（坪井川河口の港町）、などの複数の航路を使っていたことがわかる。

天草方面の場合には次のように八代を經由することもあったようである。

安政四年（一八五七）一〇月公議御目附岩瀬伊賀の守様御己下五頭（五島か？）天草より八代御渡海御帰府御通行一〇月三日南関御泊座（文政一二・後年要録）

以上の抜粋だけでも、鉄道が出来る前の伊倉では、殆どが船による移動しており、しかもこれらの記録以外にも頻繁に長崎と往復している記録が残っている。実際に長崎まで早ければ数日であどり着ける距離であるというのと、木下家の人々のフットワー

クの軽さにも着目すべき点である。有明海に面した菊池川河口の伊倉は外に開いていた土地であることがわかる。

## 2 玉名・伊倉の立地

伊倉の歴史は縄文時代に遡る。五―六千年前の縄文時代中期には縄文海進により海面が現在より5m程高く、縄文・弥生時代の貝塚が現在も伊倉台地を初めとする玉名一帯の丘陵地帯の周縁部に分布している（玉名市歴史資料集第八集一九九一）。縄文時代の伊倉周辺遺跡は、中北、本村、伊倉北八幡宮境内（縄文土器）、伊倉宮ノ後の包蔵地、天水町の竹崎・尾田の貝塚が知られている。また伊倉城址周辺の貝塚としては唐人町貝塚（伊倉北方・弥生―中世）、片諏訪貝塚（片諏訪 屋敷・縄文―鎌倉）、外平貝塚（横島 外平・弥生・中世）などがある。弥生時代としては、伊倉北方五社付近にも弥生時代の甕棺が出土する地域がある〔伊倉城址〕二〇〇三〕。

伊倉町は丘陵域が金峰火山群系丘陵・山地に属している（図3の3地帯）。金峰火山群系は安山岩、凝岩角礫岩を基盤層とする菊池川左岸丘陵及び山地である（玉名市歴史資料集第六集一九八九）。伊倉町の南、元唐人川の流れていた標高五―六mの低地は沖積低地である。図3の0a―0dの部分は縄文時代には海面

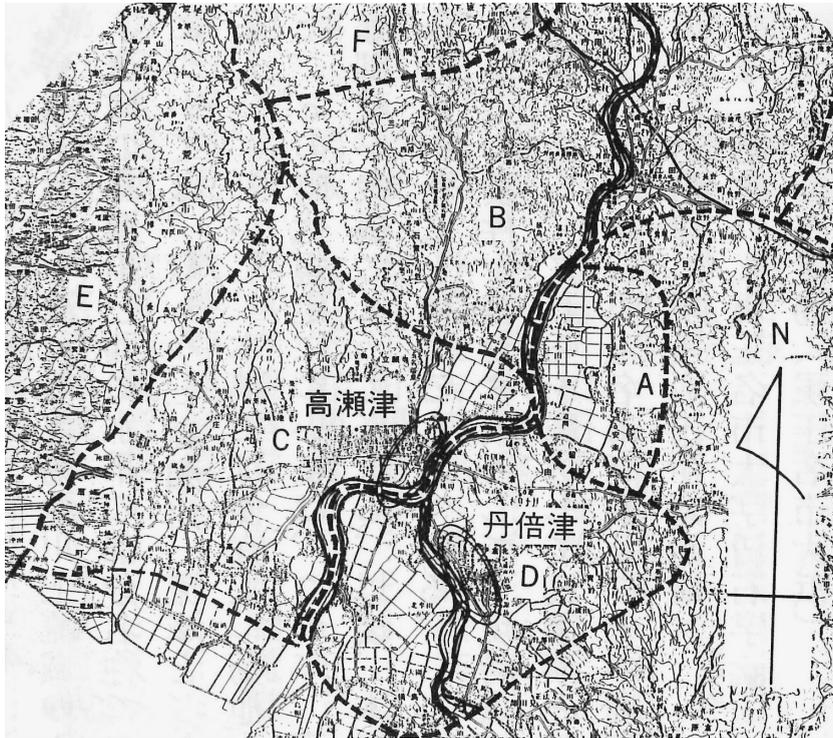


図4 丹部津位置 (玉名市歴史資料集成第一集 高瀬湊関係歴史資料調査報告書 (一) 第一図1より)「この地図は国土地理院発行の1/50,000 (荒尾・玉名・山鹿) を使用したものである」

下にあった部分である。つまり、伊倉は古くは今よりもさらに海岸間際に位置していた。

このような立地の伊倉が外の世界に開かれていたのは近代に始まったことではない。伊倉はその開けた立地と菊池川の船による流通により、歴史の中で長い国際貿易港であった。

### 3 伊倉・丹部津

中古―江戸時代の湊である丹部津は、現・菊池川の左岸の丘陵縁辺に立地する現・玉名市伊倉の地域にあったとされる。現在は伊倉周辺に大河川はない。しかし、文献や加藤清正時代の「塘(堤)」の場所や地形図(図3)を総合し、菊池川の旧河川流路である唐人川の場所から判断すると、菊池川(旧・高瀬川)は江戸時代元和(一六一五―一六二三)あたりまでは、大きく東南に蛇行し、伊倉台地の縁辺を通って横島方面に流れていたという。図4、Dが丹部津の位置と想定されている(高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)一九八七)。それを、加藤清正が高瀬川掘替工事を行い、現在の菊池川の流路としたため、伊倉・丹部津の津機能が失われたとされ



図5a 肥後国中之絵図（正保国絵図）（玉名市史 資料編1 絵図・地図より）江戸時代正保年間（1644-1648年） 図5bに図解図。



る。清正の時代後の江戸時代正保期（一六四四—一六四八）に作成された肥後国中之絵図（正保国絵図）では既に丹部津の名前は消えており、菊池川（高瀬川）の主流路も現在とほぼ同じ流路となつてゐることがわかる（図5a b）。右岸の高瀬津と比較して、海外交易の遺品、遺跡が多いのも丹部津の特徴である。以下各年代ごとの伊倉丹部津の記述を引用する。

宝永六年（一七〇九）「肥後地誌略」

伊倉丹部津

元和以前までは、異国船此所に着岸す。其船の着せし所を今丹部津といふ。加藤清正慶長年中に横嶋の石塘（堤）を築き、其の後皆々田となる。今わずかに残る流を唐人河といふ。（井澤一七〇九、二一 高瀬湊関係施設目録」一九八七）

享保一三年（一七二八）「新編 肥後国志草稿」

伊倉丹部ノ津

此所往昔三韓入具の湊にて、近国より入唐の僧俗 多くは此所より発船せしと伝ひ。

元和以前迄は唐船此所に着岸す。其船の着し所を今は船津村と云、伊倉南方桜井村内の小村なり。

慶長年中 国主加藤清正此所海 横嶋の石塘を築て後 彼辺悉く

田地となり僅残るを唐人川と云。（成瀬一七二八）

明和九年（一七七二）「肥後國志」

伊倉丹部津

往昔此所ハ三韓入具ノ津港ニテ 入唐ノ僧俗多クハ此所ヨリ發船セシト云

元和以前迄モ唐船此所ニ着岸ス 其船ノ着シ所ヲ今ニ船津村「櫻井村ノ内ニアリ」ト云

慶長年間國主清正侯 此邊ノ海口ニ横島ノ石塘（堤）ヲ氣築キ悉ク田地ト為リ 僅ニ殘レルヲ唐人川ト云

「翁巷按ニ 元和以前迄モ唐船入津ストアレトモ 已ニ慶長年間墾田ト成レリ

今明人ノ碑ニ元和年間死亡トアルニヨリ 如此書セシナルヘシ 必ス唐船ノ入津ハ現龜天正の比迄ノ事ナルヘシ」〔高瀬湊関係施設目録」一九八七）

明治一二年（一八七九）「肥後国玉名郡村誌」

古跡 丹部津 村の西字西屋敷にあり。船津と云。往古三韓入具

の港にて、唐船を繋ぎし銀杏今猶存在す。慶長年中国主加藤氏横島の堤を築てより田地となる。其下流を唐人川と云 肥後誌里俗

説。今僅に存す。

昭和六二年（一九八七）「玉名市歴史資料集成 第一集」

伊倉丹部津跡 船着場

伊倉北方字八竜

対外交易港、清正の菊池川下流堀替工事により港としての機能を失う。付近に唐人墓、吉利支丹墓などが多く見られる。船津の名残る。〔高瀬湊関係施設目録〕一九八七）

唐人川に関しては「熊本県玉名郡誌（一九二三）」に以下のよう記述されている。

この川は石塘口より有明海に至る水路に属し、天正年間以前は菊池川の本流たりしが加藤公の石塘工事竣成後は河床の一部となり。満潮の際は海路との連絡上和船の往来今尚ほ絶えず、されど干潮時は流れ頗る小なり、河中流は十間河口数十間ありて流程約一里。

現在は伊倉には唐人川は残っていないが（図2）、少なくとも正保期（一六四四—一六四八）には、伊倉丹部津は消えたものの、まだその流れは残っていたことがわかる（図5a b）。

丹部津に関連した遺跡・史跡としてはその他に以下のものがある。

る。

伊倉狼煙台 伊倉南方字東屋敷

地元では狼煙台又は灯台跡かといわれているが、確認に乏しい〔高瀬湊関係施設目録〕一九八七）。

塘 河川堤防

千田川原ノ川島

加藤清正の高瀬川堀替工事以前の「唐人川」の右岸堤防。船津、川成等の地名が残る。流路と共に、航空写真にも鮮明。千田川原、小島、小野尻、川島、北牟田を塘下五カ村という〔高瀬湊関係施設目録〕一九八七）。

4 国際貿易港としての伊倉

海外交易の遺品、遺跡は国際貿易港としての伊倉・丹部津の特徴である〔高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）〕一九八七）。

例えば、四位官郭公の墓（唐人墓）、振倉謝公の墓、林均吾の墓や唐人町などが残っている（玉名市歴史資料集成 第一集一九八七、伊倉城址 二〇〇三）。

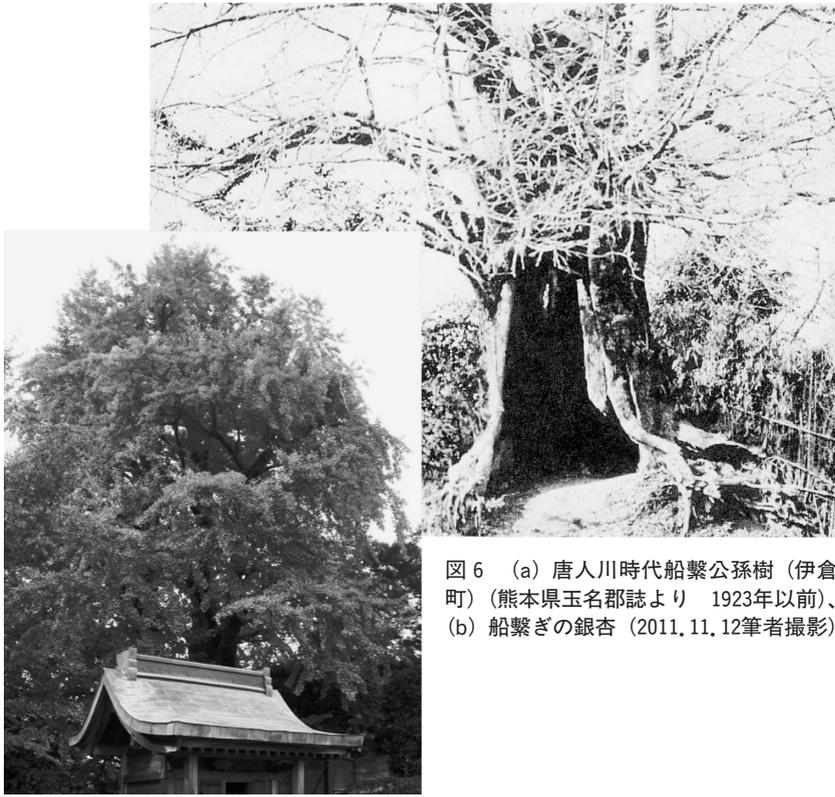


図6 (a) 唐人川時代船繋公孫樹 (伊倉町) (熊本県玉名郡誌より 1923年以前)、  
(b) 船繋ぎの銀杏 (2011. 11. 12筆者撮影)

伊倉報恩寺古文書中に天喜二年(一〇五五)寄付状に「西限唐人屋敷」の文字があり、平安時代より唐人の居留地があったことがわかる。殊に宋・明時代(九六〇―一二七九・一三六八―一六四四)には僧侶商人の往来が頻繁であった伊倉は一大貿易港として繁盛した。唐人川、唐人舟繋の銀杏、竹崎の勝地等も当時の名残である。唐人舟繋の銀杏は伊倉北方字西屋敷、松本宅庭にあり、樹齢七〇年前後。高さ二五m、目通し幹囲八mのものである(高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)一九八七)(図6)。中国貿易の海路は今も昔も同じ貿易風を利用していた。すなわち春夏の頃は南風を利用して台湾海峡に向かって航路を取っていたという。貿易の中心は寧波であって、僧侶の修行地は海辺では補陀落島(今の舟山列島)、杭州、天台山などであり、南京・長安・四川まで行くものもあった。伊倉語には中国語・韓国語が混じっているものも少なくないと「熊本県玉名郡誌」にある。

肥後四位官郭公は、明の人であり、明に仕え、四位官の位にあった。日明貿易に活躍し、日本にきて海外貿易に従事した。慶長一八年・一九年・元和二年・四年に朱印船を交趾

(ベトナム・コーチ)・西洋(マカオ)などへ数回派遣した(企画展「朱印船貿易と肥後」一九九九)。この四位官郭公の墓は伊倉・片諏訪字屋敷にある。副葬品としては青磁劃花文碗(玉名市指定文化財・覚真寺蔵)(肥後古塔録)があり、その他、郭公奉納麒麟香炉 一対が伊倉北八幡宮に所蔵されている(高瀬湊関係歴史資料調査報告書(二)一九八七)。香炉の詳細は、富田大鳳「伊倉八幡宮神祠記」によると以下のとおりである。

伝明人濱沂郭公奉納麒麟香炉

至今頼焉祠中又藏 麒麟香爐 者各一

高二三尺長五六尺 牝牡之形具 其爲

古様質素甚可愛相傳云

先是百數一〇年 萃船之來鬻者 皆湊乎

此時有明人 濱沂郭氏已歿乃葬此邑

其子 珍榮 者 封其 墳立之碑 其恭禮

(高瀬湊関係歴史資料調査報告書(二)一九八七)

またこの郭氏の墓については以下のとおりさまざまな書物に引用されている。

宝永六(一七〇九)「肥後地誌略」

陵墓… 皇明郭氏墓

伊倉にあり。銘曰く、皇明考濱沂郭公墓、元和己未年 仲秋吉

日、海澄県三都男 珍榮 建

此伊倉辺 古昔 唐船着岸の津なり。其比 郭姓の人 来朝して、此地に年月を経たりしが、病死しけるを、唐に達し、子供来て碑を建てしといふ。海澄県は漳州にあり。父 郭氏 此所にて生したる子の子孫 今に此地にあつて、其住所を今号して唐人町といふ。(井澤(二七〇九))

享保一三年(一七二八)「新編 肥後国志草稿」

皇明郭氏墓

里俗是を唐人墓と云り、本朝墳墓の模様と其製 甚相違せり、はなはだ尤 切石の構営等 精密なり

其墓銘左に記之

「皇明考濱沂郭公墓、元和己未年 仲秋吉旦 海澄県三都男 珍

榮 建」とあり、考は父と云こと沂濱は号也、海澄県は漳州の

内に在 己未は元和五年也、此伊倉辺 古は唐船着岸の津なりと

伝、其比来朝して死たる者也、其子孫今に此地に有りと伝り(成

瀬一七二八)

明治一二年（一八七九）「肥後国玉名郡村誌」

陵墓 唐人墓 村の南字西屋敷にあり。墓銘に、「皇明考濱沂郭公墓 元和己未年仲秋吉旦 海澄県三都男周珍榮立」とあり。唐人來朝して死たる墓なり。肥後誌里俗四位官の墓と云。

大正一二年（一八二三）「熊本県玉名郡誌」

唐人の墓

四位官の墓 郭公の墓

伊倉小学校西南字堀河の上に在る、本朝墳墓の様式と大に異なつて居る（口絵に在り）銘に「皇明考濱沂郭公墓 海澄県三都男珍榮 元和己未年仲秋吉旦建」とあり考は父 沂濱は号である海澄県は福建省南部の都会である。里説に郭公没する時里人篤く看病せしかば易珍榮之を徳として大平寺を再興し貴重なる香木を用材としたといふ事である、又北八万麒麟の香爐は郭公の献品だといふ事である。

この墓の具体的なスケッチは「古今肥後見聞雜記（抄）」（別称）にあり、そのスケッチによると墓銘は「皇明考濱沂郭公墓 元和己未年仲秋吉旦 海澄県三都男周珍榮立」である（寺本一七八四）。写真は、「高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）」一九八七の第五図版、及び「熊本県玉名郡誌（大正一二）」にある。

郭氏に比べて情報が少ないが、振倉謝公墳も御朱印貿易に関係していると考えられている。伊倉本堂山にあり。墓銘に「大明振倉謝公墳」とある。その名前から、古伊倉に住んだと考えられる明人の墓とされる（企画展「朱印船貿易と肥後」一九九九）。

また唐人以外にも国際貿易港の名残として、吉利支丹墓碑が伊倉北方字船津に残されている。蒲鉾形の典型的ギリシタン墓碑で、近代に入り、墓地土中から掘り起こされたものである（玉名市指定文化財）。墓地所有者の中山幸子氏宅には「伴天連の髪」と伝えられている東洋人のものではない髪が保管されている（高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）」一九八七）。

## 5 朱印船貿易

一六世紀末から一七世紀前期にかけて、東南アジアを舞台に活躍した日本の官許貿易船が御朱印船である。もともとは本稿「3 丹部津」にあるように私貿易船であった。やがて官許貿易船の証明となる渡航証明書である「異国渡海朱印状」を持参する制度が定められた。朱印船は最初に豊臣秀吉が創始者としてあげられているが、史料が確認できるのは徳川家康の時代の慶長九年（一六〇四）であり、ここに朱印船制度を正式に実施されたことにな

る。

加藤清正も慶長九年（一六〇四）には船を新造し、慶長一二年（一六〇七）に西洋（マカオ）、慶長一四年（一六〇九）にタイ（暹羅・シヤム）、ベトナム（交趾・コーチ）へと朱印船を派遣している（企画展「朱印船貿易と肥後」一九九九）。この時の清正の船もおそらく伊倉の丹部津または対岸の高瀬津のどちらかから出航したはずである。

清正の船も含め、朱印船の特徴は、船体の基本が中国式ジャンクで、かつ、一部は西欧のガレオン船の技術を導入している折衷形式であり、船首楼の構造は日本の軍船の要素が混入しているものであった。これらの船体の寸法は、長さがおよそ二〇―二五間（二六―四六m）、幅四・五―五間（八・二―九m）程、乗員数は三〇〇人―四〇〇人、積量は五五〇―七〇〇トンの大きさであった（石井一九九五）。

一六三五年までの三二年間に朱印状の発行数は三五五艘である。一年平均一一艘、多い年には二〇艘の御朱印船が海を渡った（石井一九九五）。また、日本に在留していた外国人も、日本で船を仕立てて、海外貿易を行う場合には、日本人と同じく朱印状を受けが必要があった（岡田一九六八）。上記の伊倉・郭氏もそれに基づいて海外貿易を行っていた。御朱印船以前からの輸出品の

主なものは、硫黄、銅、太刀、鎗、扇子、瑪瑙、蒔絵物、石王寺硯、琥珀、屏風などであった。一方、輸入品としては、銅銭、紵絹、錦、布綿、繻、鐵（鉄・くろがね）、鍊鐵、鍋銀器、磁器、古文銭、古名畫、古名字、古書、藥材、氈毯、漆器、などであった（熊本県玉名郡誌一九二三）。この貿易の利益は莫大なものであった。そして、この中でも同田貫の刀剣は非常に重要なものであった。

### 三 刀の時代・鉄砲の時代

木下熊雄における二つ目のグローバル性の背景としては、幕末―明治という時代における木下家のかかわりがあげられる。

キーとなるのは前述の「同田貫」である。

#### 1 同田貫

御朱印船貿易の輸出品である同田貫どうたぬきとは、熊本県菊池郡の菊池氏が鎌倉時代（一一八五頃―一三三三）に山城国（現在の京都府南部）から招聘した名匠来国俊の流れをくむ刀工・延寿太郎（延寿国村）を始祖とする延寿派刀工群の末裔のことである。南北朝時代（一二三六―一三九二）、この刀工群は、熊本県菊池郡西寺



図7 菊池・今村 木下韃村・木下梅里「古耕舎」跡 (2011. 11. 13筆者撮影)

村から同じ菊池の野間口村・今村・高野瀬村・稗方村・藤田村などにも分派した。今村は木下熊雄の父、助之の生まれ故郷でもあり、長兄・木下韃村(幼名・宇太郎、名・業廣、字・子勤、通称・真太郎、号・犀潭)、次兄・木下真弘(通称・小太郎、号・梅里)が私塾「古耕精舎(古耕舎)」を開いた土地である(図7 菊池・今村 古耕舎跡 二〇一一)。

加藤清正の時代には菊池・稗方村同田貫から有明海沿岸部の高瀬川(現・菊池川)河口の玉名亀甲村、伊倉南方村に移住した(田邊一九九七、石原一九九七)。

これが伊倉の木下同田貫、玉名亀甲の小山同田貫である。伊倉の木下同田貫の初代は左馬之助清国、玉名の小山同田貫の初代上野介正国といい、清国が兄、正国が弟と言われる(石原一九九七)。正国は加藤清正から正の字を与えられ正国と名乗り、兄ははじめ国勝といったが清正の清の一字を与えられ清国と改めたという(松本二〇〇五)。伊倉の鍛冶屋町はこの左馬之助清国をはじめとする同田貫の一派が菊池・今村から移住したことによりその名前が付いた。つまり刀鍛冶の鍛冶屋町である。この直系の子孫が伊倉の木下恵吉とされ、木下熊雄の曾祖父である(表1)。木下熊雄の父である助之の記録として、文久三年亥二月 家記「先祖菊池郡劍工延寿家以来の由緒」が残されている(木下家家関係資料3)。

木下左馬之助清国は刀に同田貫の名前を冠したものが無いといえ、数は少ないが存在することが判明しており、玉名市立歴史博物館こころピアの企画展で度々行われている。これまで展示されているものは以下のとおりである。

- ・天正―慶長頃の刀 清国 銘(表)「肥州住藤原清国作」(熊本県玉名市 生森元哉氏蔵)(企画展「同田貫II―歴史に名を連ねる豪刀―」二〇〇四)
- ・室町末期―桃山時代の薙刀 清国(銘(表)「肥州住藤原清

国」(熊本市立熊本博物館蔵)(企画展「同田貫II―歴史に名を連ねる豪刀―」二〇〇四)

・室町末期―桃山時代の薙刀 清国(銘「肥州住藤原清国作」)(熊本県熊本市 笹原俊和氏蔵)(企画展「同田貫―豪刀と幻の銃―」二〇〇五)

・室町末期―桃山時代の刀 清国 銘「肥州住藤原清国作」(熊本県菊水町 石原幸男蔵)(企画展「郷土の刀剣・同田貫」)

加藤清正の入国後は、同田貫は清正の抱え刀匠であり、清国(伊倉同田貫)・正国(亀甲同田貫)が清正の御用刀を打っていたという(熊本県玉名郡誌)。加藤清正の書簡では以下の通り、朝鮮出兵の準備のための武器の調達及び、朝鮮出兵後も、長刀・持鍔を堂(同)田貫、木ノ下(清国)、伊倉に作らせている(松本二〇〇五、森山&村上二〇〇五)。

天正一九年(一五九二)八月十三日

一 長刀五十本、持ち鍔百本、堂田貫、木ノ下、伊倉ら両三人に申し付け、前の鍔よりすこし軽いように打ちせよ、来年三月以上に作りて置くように、もし出来ないようならば、豊後の方にも作らせるように。(渋沢栄一所蔵文書 市史)

5古346)

文禄二年カ(一五九三)六月朔日

尚以て持ち鍔身の長さ一尺ニ打たせ、五百本も千本も出来るだけ作らせて置くように、長柄の鍔も出来るだけ打たせるよう、堂田貫・木下に刀を出来るだけ打たせ、あめ鞘でもよいので作らせること。(下川文書 市史5古354)

文禄二年(一五九三)八月八日

一 伊倉・木下・堂田貫に、一月に刀十腰ずつ打たせること、鞘は白さやで良い、長さはいつもの通りで良いが、切れ味が悪ければ代価を払わない、もし支払ったものは代価を取り返すように。(下川文書 市史5古353)

堂田貫には正国、清国の他に右衛門、兵部、又八、信良、国治、国正などがある(松本二〇〇五)。また熊本城の備刀も皆同田貫であった(石原一九九七、熊本県玉名郡誌一九二二)。同時に清国・正国を初めとする同田貫の刀は、海外貿易の重要な交易品でもあった。おそらく清正の仕立てた御朱印船にも積み込まれていただろう。伊倉木下同田貫の木下左馬之助清国は、加藤家改易の後は仕えることを好まずして民籍に入ったという(熊本県

玉名郡誌。

しかし、清正は御朱印船で海外貿易をすると同時に、大規模な河川流路変更と干拓も行った。旧小田郷（明治三年までの手永（図2小田手永）、伊倉・横島・大浜間は加藤清正以前は菊池川（唐人川）の流域であったが、天正一七年、清正が菊池川の水を大浜・小浜の間に導き、現在ある高瀬町より滑石村及び大濱町間の菊池川堤防を築き、更に久島・横島の間にある石塘（堤）を埋め立てて、干拓により八七〇町（八六三ヘクタール）余の田んぼになった（図5）。この大干拓は天正一七年から慶長一〇年までの一〇年もの歳月を費やされた。このため清正は多大な利益を得ることが可能になった。それと同時に玉名市沿岸は、加藤清正により滑石村晒地方より以西、筑後境に至る沿岸の松林が伐採された後、海岸に土砂が堆積し漁獲が激しく減少してしまい、小魚類・貝類ぐらいしか獲れなくなってしまうとされる。これが原因かどうかは不明だが、近海で漁獲が落ちたこともあってか、それともとも長洲地方漁民が航海に慣れていたこともあってか、明治三六年頃には、沿岸部の漁民は韓国沿岸まで遠洋漁業に行っていたとも書き残されている（玉名郡是一九〇三）。

徳川時代が進むと、伊倉津の貿易や漁民にとって事態は更に悪化する。細川藩は、加藤清正の干拓に引き続き、横島・大浜・玉

水・小天の地の先の海を毎年のように埋め立て、その面積は明治の時点で面積二六八町三反余歩（二六六ヘクタール）にもなり海岸線は現在とほぼ同じような姿になった（図2干拓地・図30d）（玉名郡是一九〇三）。農地拡大の為に漁民や海によって立つ生活が脅かされるのは同じく有明海の諫早の水門と干拓問題などと同じ構図である。

干拓とは別の問題もあった。鎖国である。

徳川家康は慶長九年（一六〇四）に、貿易船は朱印状（渡航証明書）を持つ船のみという朱印船制度を実施し、海外貿易の利益を幕府のみのもとする制度であった。一方で、その五年後の慶長一四年（一六〇九）九月 徳川幕府は西国大名五〇〇石積以上の大船を停止・没収した。元和二年（一六一六）八月 幕府は中国以外の外国船の来航を長崎・平戸に限定。この年代頃までは伊倉丹部津の郭公の唐人墓（元和五年（一六一九））などの記録から、伊倉に唐人がまだ来ていたことが判明している。寛永一二年（一六三五）五月 外国船の入港・貿易を長崎・平戸に限る。朱印状の発行つまり朱印船の派遣も一切停止され、鎖国となった（石井一九九五、企画展「朱印船貿易と肥後」一九九九）。鎖国から六〇年後、元禄一四年（一七〇一）の肥後国図では、各地の船着の記載がみられるが、港湾間の海上道のりが略されており、そ

これは幕府の指示により下絵図段階で削除ないし簡略化されていたものであった（松本一九八八a）。寛永・元禄・正保年間の肥後国絵図にはもう丹部津の名前は港の名前から消えている（図5）。伊倉の国際貿易港としての役割はここに完全に途絶えた。一方、対岸の菊池川右岸の高瀬港は国内貿易港として熊本藩最大の蔵米積み出し湊として菊池川の水運を利用し、流域の蔵米二五万石を集め、大阪に回送する重要拠点として変わらず発展を続けていた（「伊倉城址」二〇〇三）。

## 2 同田貫鉄砲

清正の改易と同時に刀鍛冶からは手を引いて民籍に入ったものの、伊倉木下家は嘉永六年（一八五三）ペリー黒船来航のその冬から、今度は鉄砲の製作を担うこととなる。木下熊雄の父・木下助之文政一二年・後年要録及び嘉永三年・後年要録にその記録が残っている。

肥後同田貫の刀工たちが鉄砲を製造していたことはあまり知られていない。同田貫の刀剣は江戸時代中期には衰退しており「坂下手永同田貫村の鍛冶共、刀脇差を鍛える者の有無を調べたが、現在は鉄鎌等を作成するのみで該当者なし」（「熊本藩年表稿」明和二年（一七六五）年の項）という記録が残るのみである。劇作

家の木下順二の長兄・国助が亡くなった時、その葬儀は伊倉の菩提寺光専寺で行われたが、その時熊雄の兄であり家長であった弥八郎は一軒一軒の労働量に合わせた鋤（すく）や馬具などの農器具を木下家の小作人に分け与えたという（木下一九八三）。これも同田貫の名残を感じさせるエピソードである。

文政一〇年（一八二七）、同田貫刀鍛冶を中興させたのがその坂下手永亀甲村（もと同田貫村）正勝（小山宇兵衛（右兵衛））である。正勝は刀剣のみならず、亦砲工の技にも熟達しており、鍛刀を長子・（小山）寿太郎に、砲工を次子・四郎八に伝授した（養田二〇〇五、宇野一九五一）とある。江戸時代の事であるから鉄砲＝火繩銃のことである。

このころ同田貫刀工では坂下手永以外も鉄砲製造を行い始めていたらしい。天保九年（一八三七）の記録には、坂下手永同田貫の鉄砲について「最近作っている大筒は格別に手際よくできている。藩内で多くの職人が鉄砲を造っている」とある（養田二〇〇五）。ちょうど同時代の天保七年（一八三六）熊雄の祖父・初太郎は、鉄砲五拾挺之副頭の転役の件についてや、天保十一年（一八三九）七月の砲術師役志賀稽古場火薬より失火（文政一二・後年要録）などの記録を残している。これを見ても初太郎が鉄砲、砲術などに気をかけていたことが読み取れる。これらの同田貫刀

工及び惣庄屋を中心として行われた鉄砲製作は、幕末という時代の必要にせまられたものであった。ちょうど日本国外ではアヘン戦争（一八四〇―四二）が起きた時代に、日本の周辺には多くの外国船が訪れており、また熊本から有明海を挟んだ向こう岸が長崎ということもあり、防衛としてこれまでの同田貫刀だけではなく鉄砲製造が急務となっていた。

文政一二・後年要録には以下の記録がある。アヘン戦争の一年後の天保一五年（一八四三）七月二日の記録である。

オランダ王国より使者の船長崎へ着岸、前以て通商のオランダよりその段申し出候に付、諸家様方御人数被差出候用意有の、この元も一番手二番手迄その用意被仰せつけ、浦々の大小船二丁川口に乗り廻し被仰せつけ、六月二―三日より盆前中滞船、兵糧・武器等熊府より同所へ運送被仰せつけ、九月二八日右船帰帆。

この翌年の弘化元年（二八四四）正月、初太郎の婿養子となる二〇歳の助之は、太田流砲術の後藤源太佐衛門先生に入門、嘉永元年（一八四八）四月には砲術入榭つまり鉄砲を射ている（嘉永三・後年要録）。この後藤源太佐衛門（太田流）というのは、お

そらく先の坂下手永同田貫の内田（小山）四郎八が文政元年（一八一八）から天保九年（一八三八）の間に鉄砲を製造し納入したという記録のある、藩の砲術師範の一人後藤惣左衛門の関係であると思われる。もちろん四郎八はこの後も多くの銃砲を製造し藩に貢献し、安政四年（一八五七）頃には次男の内田軍八が跡を継いでいる（養田二〇〇五）。助之はこの後藤源太佐衛門先生の門派からは嘉永二年（一八四九）閏四月には離門している。前年の嘉永元年（一八四八）一二月に、助之は菊池木下家から伊倉木下家の初太郎の婿養子として引越婚礼を行っている（文政一二・後年要録）為、おそらくこの引越しが後藤（太田流）離門の理由の一つであろう。ひと月もたないうちの五月には今度は原野新四郎先生の門下の砲術に入門し、六月には原野先生のところで初榭を行ったようである（嘉永三・後年要録）。その間、外国船の動きは激しくなるばかりであった。弘化三年（一八四五）六月、初太郎は、『長崎に異国船渡来、無程出帆、フランス船の由。六月薩摩琉球国に右同断、若殿様不時御下国、同月相州浦賀にも北アメリカ州船二艘右同断、八藩の御人数被差出、右両所共無程出帆の由』と立て続けに記録している（文政二一・後年要録）。助之が初太郎の婿養子に入った同じ年の嘉永二年（一八四八）七月一日には、五島兵部、松前為吉宛ての「異国船渡来に付、城築

立、海岸防禦に勤むよう指示する」との書類が木下家文書に残されている（草稿24）。

嘉永六年（一八五三）六月、ペリーが浦賀に来航する。初太郎は浦賀に渡来したペリーの軍船についての情報を熊本まで一日程で入手し、内容を記している。続いて七月十七日にはロシア船が長崎に渡来し九月に去り、一二月に再度渡来し、一八五二年の二月八日までいた、と記録している（文政一一・後年要録）。この年の冬、関町（南関）に於いて木下助之（徳太郎）は、岡本久衛門・津留次郎左衛門・瀬上権之助などと共に鉄炮製作の世話人を仰せ付かる。この件について初太郎が嘉永六年（一八五三）の「事業」として、「鉄炮政策水車運具方仕立」と書き残している（文政一一・後年要録）。黒船出現とそれに対する諸外国への初動としては非常に速い対応である。

翌年の嘉永七年（一八五四）嘉永七年（一八五四）正月二日アメリカ船七艘が再び江戸表渡来する（文政一一・後年要録）。それを受けてか、二月一日、助之は前年と同じメンバーと共に四名、西洋流修羅筒製作の研究に精を出すよう通達を受ける。これは杉浦津直から惣庄屋木下初太郎宛ての要請であった（嘉永三・後年要録）。時に初太郎五一歳、助之三〇歳である。また、閏七月一二日の日付のある木下初太郎宛、差出人小山門喜による書簡

「雷銃之図入用」が木下家文書に残されている（書簡35）。年号が無いが、閏七月一二日は閏七月ということと内容から、おそらく嘉永七年のものとみてよいのではないか。またこの小山門喜という人物は、おそらく坂下手永亀甲村同田貫刀工・砲工の小山正勝（宇兵衛）の關係で、「雷銃」とは西洋の新方式の「雷管銃」鉄砲のことではないかと考えられる。

この年はまさに木下初太郎・助之父子による木下惣庄屋の南関手永の事業として最新式の西洋流の銃砲製造を推し進めた年といえる。六月六日には助之は続けて池部弥一郎先生に砲術入門をした。ただし、付記として、池部先生が熊本を留守にしていたので、親啓太殿に入門とある（嘉永三・後年要録）。更に八月から九月にかけては二〇日程もかけて西洋砲製作の用法を研究するために長崎まで出かけている（文政一二・後年要録）。初太郎は『異国船が追々所々に渡来、七月イギリス四艘長崎に来、オランダ本国船一艘も長崎に来、九月ロシア船一艘大坂に来て追いかして浦賀に回る』と書き記している（文政一一・後年要録）。次の年の嘉永八年（一八五五）、南関手永の事業として初太郎は、「製硝発起」と記録している。硝とは硝石のことであり、黒色火薬の原料の七五%を占める主原料として、まさに文字通りきな臭い銃砲に必需品であった。南関手永の鉄砲製造所

を作り上げる過程で技術的な指導者となったのは、南関手永の鉄砲製造記録によると和田源太郎という砲工であったらしい。和田源太郎は西洋流の銃砲製造にかけては無類の土工であり、文久三年（一八六八）以来、坂下手永繁根木でも西洋流の鉄砲製造を開始し、南関と坂下を合わせると数百人の細工人に指導を行ったとされる（養田二〇〇五）。

安政三年（一八五六）六月、幕府は異船防御の為、日本国中の寺院の撞鐘を大砲・小銃に造り替える旨の御達を出す。惣庄屋であつた木下家もその連絡を受ける（文政一二・後年要録）。

安政四年（一八五七）四月一日、西洋流砲中段目録ならびに本目録一同に相伝（嘉永三年・後年要録）と助之による記録があり、初太郎・助之を初めとする南関手永事業は軌道に乗ったことがうかがえる。更にその成果に対して、九月二八日西洋流の筒製作に關して心魂を砕き心配仕え候、ということ、御小袖一、金子式百疋拝領（「文政一二・後年要録」、「領国」）と報償貰つたとある。またこの件は「嘉永三・後年要録」においては、御郡代に呼ばれて、南関に於いて、西洋流之筒製作に心魂を砕いて種々研究し、その仕法が成就したということで作紋麻上下一具、金子百疋を貰つたとなっている。これは「文政一二・後年要録」では九月二八日の出来事、「嘉永三・後年要録」では一〇月一日の出

来事となつており日付に若干のずれがあるが、内容から考えると同じ件に見える。更に一〇月三日には、公議御目附・岩瀬伊賀の守が天草より八代を海路渡つて熊本に帰る途中、御細工頭格（御徒目付）・平山謙次郎、小森田角左衛門方、御小人目付・鈴木欣三郎殿 角屋次右衛門方と共に南関に宿泊したとの記録がある（文政一二・後年要録）（嘉永三・後年要録）。その際に南関製の銃を賞賛され、翌日（一〇月四日）筒（鉄砲）と雷冒の両方を差し出したところまた賞賛され、平山殿と伊賀守の双方から手跡を頂いたとある（嘉永三・後年要録）。つまりこの時には南関手永事業は事業として数年で非常な成功の域に達していたとみえる。

文久二年（一八六二）八月二日、薩摩藩と騎馬の英国人の間に生麦事件が起きる。それからひと月もしない九月二八日、木下助之は南関手永にて西洋筒製造方見扱に、一〇月一九日には御用鉄砲を前述の坂下手永亀甲村同田貫刀工・小山正勝の二男・砲工・内田四郎八に製造させるに付き製造方御用懸に任じられる。また同時に南関手永製造方についても御用懸を任じられている（嘉永三・後年要録）。

文久三年（一八六三）助之は今度は砲器類を新規に製造するとして、その御用懸に任じられる。砲器類▽西洋筒ということ、ますます武器の範囲が大きくなってゆき、これは元治二年（一八

六五) 正月には坂下・南関手永の両方での小銃製作の御用懸へと繋がつていく(嘉永三・後年要録)。鉄砲は、改良を更に重ねられたと見え、慶応二年八月(一八六六)には、玉名御惣庄屋共が差出人となった「方今之時勢ニ付御内意之覚(在中帯刀以上の者 組合を立てケーヘル筒 打方修練いたす事)」の文書が残されている(草稿21)。このケーヘル筒というのは、「ゲーベル銃・ゲベル銃(Gewehr)」のことであろう。ゲーベル(Gewehr)というのはオランダ語で小銃の意である。天保二年(一八三一)に高島秋帆が輸入した一七七七年式オランダ歩兵銃が代表的で、火縄銃との違いは点火方式である。もともと火縄ではなく火打石で点火する形式であったが、一八四五年からは更に火打石式から雷管式の発火装置に改良されている。幕末には諸藩で模造、国産化された銃である(広辞苑 第四版)。

この後、江戸幕府が斃れるが、明治元年一月には差出人 御惣庄屋共となっている御内意申上覚「海辺、境目警衛の入費見込之趣」(草稿20)が残されており、また翌年の明治二年二月には実際に海岸御境目筋の手永銃隊や、大浜の河原にて小田手永・内田手永銃隊、晒御渡において坂下手永銃隊を見学紹介を担っている(文政一二・後年要録)。防御は明治になってもまだ手永・惣庄屋の仕事であった。手永制度と惣庄屋制度は明治三年(一八七

〇) 八月に廃止され手永は郷と改められた。維新は熊本には明治三年にやってきたと云われるが、まさにその通りであったことが記録から明らかである。更に明治二年(一八八九)、伊倉北方、伊倉南方、宮原、横田、片諏訪の五ヶ村が合併したのが伊倉町である。ただし「伊倉町」の名称自体は、古くからこれら村々の総称として使われてきた。寛永一六年(一六三九)「玉名郡田島高帳」(伊倉南八幡宮文書補50)には「伊倉町唐人屋敷」とあり「七石壺升八合六勺七才 御物成三斗五升壺合」の引高がある「伊倉町」の名が見られる。しかし行政的には明治二年になるまで各村に分割されており、現実的には町として機能しているのにもかかわらず図5 a、bの正保国絵図では伊倉北方、伊倉南方と分割されて記される実体のない惣名であった(吉田二〇〇五)。また、上記の鉄砲製作とは別に、木下家は国際取引に関してはその後も関わっていたこと及びその内容に関しても深く把握していたことが伺える。例えば草稿として、多くの取引について、

「内議草稿 夷人との諸産物交易における洋銀と歩銀の交換規定設置について」(草稿21、22、23 (九月))

「長崎表にて夷人へ売渡候茶代之儀洋銀交換について」(草稿24)

「付紙之草稿 諸外国との交易における洋銀交換の仕法」(草稿

215、216)

一〇月の日付がある荒尾角兵衛産物方からの覚として「洋銀と歩銀交換規定を決するを願う」(草稿217-1)などの書類が残されている。

これらの草稿には年号がないので一概に言い切れないが、万延元年(一八六〇)に『春金子之値段大に引揚、近年夷人通商に付而して茶・蠟・絹・石炭その他種々之価引き揚げ候内、当春金子直段 俄かに引揚、通用之判金壹歩金三両壹歩にしかして御引替被り仰せ付け趣をも御達しに相成り、その外慶長金の七一八両にも及ぶ候程之直段也…』(文政二二・後年要録)との記録が残っており、更に四月の日付で木下(助之)による覚書として『産物方は目利きの益にのみとらわれず国民の益を考えて功業に務めるよう進言』という草稿(草稿218)が残っているので、时期的にはこの前後のものかもしれない。いずれにせよ、江戸時代より前から国際貿易港であった伊倉の木下家ならではの視点と指摘と言える。

#### 四 木下家の人々

三つ目のグローバル性の背景は、木下熊雄の周辺の身近な人物

の視野の広さと科学への指向性である。

##### 1 新進気鋭の学風

木下熊雄の父・助之(初名・助之允、徳太郎、諱・雅隆)は文政八年(一八二五)一月一日熊本県菊池郡今村(韃磨邑)に生まれる(図1b)。木下右衛門の四男であり、長兄に木下鞆村がいる。嘉永元年(一八四八)、当時南関手永総庄屋であった木下初太郎の婿養子となる(嘉永三・後年要録)。嘉永元年九月の木下初太郎から御郡御奉公所宛の木下徳太郎婿養子願いの書簡が残されている(家関係資料4「口上之覚(木下徳太郎婿養子願)」)。

助之の人柄に関して、「熊本県玉名郡誌」では松尾常との署名で「識慮高卓、儉素自持」であると表している(熊本県玉名郡誌一九二二)、また、木下助之墓碑銘にはその人となりは「方正嚴肅 思慮周密 幼年習武及服政務 以興利除害」(明治三四年一月)とある(高瀬湊関係歴史資料調査報告書(二)一九八八)。

木下熊雄の父・助之の長兄は、木下鞆村(諱は業広、字は子勤、士勤、名は宇太郎、後に真太郎)である。伊倉と同じく菊池川左岸、肥後菊池郡今村(古賀二〇〇八)にある。鞆村の洋学観と学風について安井息軒が「木下子勤墓碑銘」で以下のように記

している。

「及(三)洋学興(一)。門人有(下)読(三)蟹文字(一)者(上)。則勉以通(三)一觀大勢(一)。講(三)一究丘略(一)。」  
 (西洋の学問が日本に入ってきて、横文字(蟹字)を読む者が門人中にも現れてきた。世界の大勢を広い視野から観察し、軍事戦略を研究するには西洋の学問を学ぶ必要がある。古賀釈文)

また娘婿の井上毅も渡欧、二男の木下広次はフランスに留学しており(古賀二〇〇八)木下家にはフランスから木下広次が助之に宛てた書簡が残っている(書簡55)。

一方、熊雄の祖父・助之の養父・木下初太郎(諱・國均、文化元年(一八〇四)六月一日生)(図1c)、については、教育熱心家で、特に経済が得意、文化輸入の先達であったと言われる(熊本県玉名郡誌)。事業の主なるものとしては、

- ・ 大野牟田水害普請
- ・ 海辺塘手の普請
- ・ 零落村の救済
- ・ 紙製奨励(楮栽培)
- ・ 西洋流文筒製
- ・ 養水力水苗の仕立方(洪水後)
- ・ 高瀬お蔵及び茶屋の普請

・ 高瀬藩設置の計量世治等

であり、公益事業に盡したことがうかがわれる。

玉名郡誌では、「先生は謹直と強記とを以て聞こえた方であった。殊に算数の方面に明な方であった。和漢の学にも固より造詣あり:」(「攻玉」第三号、「熊本県玉名郡誌」とあり、また、伊倉・木下初太郎墓碑銘にはその人となりとして「方正勤儉 好書 精算術 善和歌」とある(玉名市歴史資料集成 第五集「高瀬湊 関係歴史資料調査報告書(三) 一九八八)。

助之・初太郎の人物評と、帝國大学動物学教室の後輩大島廣が木下熊雄について「闘志満々、後輩を『教育』するのにも毫も呵責しないおそろしい存在だった。頭が鋭く、大抵の人間がバカのようにみえるらしく辛辣に人を批判する。元氣者で昼間は潜水採集の指導で鍛えられ、夜は宗教論などで理屈攻めにあった。」とのべた人物評を、彼ら三人の写真と並べると、なにかいろいろと納得出来るような感じがしてくる。

## 2 彗星と水

木下熊雄の祖父・初太郎の日記を父・助之が纏めた「文政二二年(一八二九)丑正月後年要録」では、度々彗星について記述しておりそれが非常に正確であり、科学的にも正しい記録であるた

め、今日においても観察記録として役に立つものである。

初太郎は天保六年（一八三五）の旧暦八月末〜九月初旬にハレー（Halley）彗星（1P/1909 R1）が西北に現れたことを記録している。この年は天保の大飢饉であり、目撃記録は存在しないとされている（杉岳志二〇〇五）。また嘉永六年（一八五三）ペリ来航の年の旧暦七月半ばから、初昏（日が暮れた頃の薄明の頃）の西北西の方角に、地平より一七―八度に彗星が現れ、夜々に低くなっていき七月末には見えなくなった、と記している。これは非常に正確な記録であり、おそらくクリンケルフューズ（クリンカーフューズ：Klinkerfues）彗星（C/1853 L1）と考えられる。安政五年（一八五八）にはドナチ（ドナティ：Donati）彗星（C/1858 L1）を記録している。

八月彗星暁見東北、月末に至夕に西北に見、長大四〇度に及漸南に転移、九月中旬に至不見（文政二年（一八二九）丑正月「後年要録」）

文久元年（一八六一）には、テバット（Tebutt）彗星（C/1861 J1）について観察している。

文久元年（一八六一）五月彗星西北に現、二五日夜頓に顕る、星体蒙昧、雖不可明見太白（宵の明星・金星）よりも大にして其尾百度に及ぶ、翌晚より次第に小クなり七月上旬に至不見（文政二年（一八二九）丑正月「後年要録」）

いわゆる一八六一年の大彗星（Great Comet）と呼ばれるもので後年要録の記述の通り非常に明るかったことが知られている。このことから初太郎の記述が科学的にも信頼のおけるデータとなることがわかる。

文久二年（一八六一）

七月彗星西北に現、二五―二五日より漸見、其尾光微にして長さ事二三尺、漸南遷赤道を越八月中旬に至不見

つづく文久二年のスイフト・タートル（Swift-Tuttle）彗星（109P/Swift-Tuttle）に関しては比較的規模が小さかったことから、出現の記録が見いだせないとされていた（杉岳志二〇〇五）。しかし山口県下関市の真言宗 福仙寺にこの彗星の記録が残されており、日本で唯一の記録と言われている（宗教法人真言宗 福仙寺所蔵 幕末期の彗星スケッチ図）。後年要録にはしつ

かりとこの彗星の記録が残されており、日本における彗星の記録としても非常に重要なものである。

その他、初太郎が記録している彗星の内、「文政一二年後年要録」に記されているものは次のとおりである。

コッジャ彗星 (Cogias Comet C/1874 H1)

明治七年 (一八七四) 七月上旬 彗星夕に西北に顕、初昏 (日が暮れた頃の薄明の頃) 亥の方に見ゆ、星体、尾、共に微小六七日にして隠る。報知新聞三九四号に七月二日横浜で北方に彗星を見るの由を載す

デバット彗星 (The Great Comet of 1881 C/1881 K1)

明治一四年 (一八八二) 六月末より 彗星西西北に出現。尾長三四尺 北極に近接 恒顕界の内にある故に、昏暮に西西北に見え、暁に東東北に見え、終夜地平に没入せず。  
 七月中ようやく微小になり、八月中旬に消滅  
 八月 彗星また西北に現れる。前述の星ようやく微小にして有るかなきかの頃にはるかに所を変え、西より少し北によりて顕れ、速に南に移り九月上旬月光にて見えなくなりてやみぬ。

このような記述からすると、木下熊雄の甥・国助 (木下順二の兄) が天文学にすんだのもあるいは曾祖父の初太郎にそのルーツが辿れるのかもしれない。

初太郎はまた、新しいものを導入するということに関しては、「世界地図を編し、地球儀を研究し火薬の製法に意を用いられし如き：」(「攻玉」第三号、「熊本県玉名郡誌」と言われ、厳寒の夜、通夜燭 (あかり) をともして、氷の結ぶ実状を調査し針状のものがパツパと集り堅氷の基を造ることを発表したという、実験的研究家であったとも言われる (「熊本県玉名郡誌」一九三三)。

木下助之も、「安政三丙辰年正月」(「第三日記」)にて、安政三年四月九日、水銀晴雨計・驗液器・眼鏡が届いた、京都・高木春芳から「植物学啓原」・「理学提要」を二部下す、と理学の実験道具や文献といえるもの入手したことを記録している (玉名市立歴史博物館ころろピア資料集第四集一九九九)。

これらのことから木下家では江戸時代から常に新しい学問や科学の知識が日常的に存在している環境であったことがわかり、熊雄の兄・秀吉が物理学に熊雄が動物学に進む素地があったともいえる。また初太郎や助之が惣庄屋の事業としておこなった様々な新技術導入や開発、大工仕事が得意だったという秀吉や、やはり木彫が得意で新しい船の櫓の構造を設計したりしていた熊雄の

行動にも重なることが多い。彼らは常に現実をよりよくするところが生業となっており、知識や学問を実際の実学に応用する姿勢は木下家の者として共通している。

## 五 木下熊雄のグローバル性

土地のグローバル性、時代のグローバル性、人物のグローバル性という三つの背景の元に木下熊雄とその親戚は理系の学問の道に進んだ。木下熊雄自身は留学をしていないが、論文などは常に新しいものをドイツやイギリスから収集し、把握していた。

祖父初太郎の彗星記録に通じるような、木下熊雄の痕跡として、大正一二年（一九二三）発行の「熊本県玉名郡誌」の第二編博物第一章 動物 無脊椎動物リストがある。

木下熊雄は一九一二年に東京帝国大学から博士論文を提出し、理学博士号を授与されたが、その後一九一四年には郷里の熊本に帰っている。郡誌の発行が大正一二年四月三〇日であるが、このリストの動植物の内容がどうみても当時の東京帝国大学動物学教室の知識を持ったものでない限り出てこない生物が満載であり非常に面白いことになっている。

一部を抜粋すると以下のとおりである。

無脊椎動物 ○印玉名郡内所産

◎アメーバ（流虫） 原始動物 池沼中ノ藻類ニ付着ス

◎イソギンチャク 珊瑚類 海産一種ヲ食用ニ供ス

◎ウミウチハ 珊瑚類 海産裝飾用

ウミエラ

ウミシヤボテン

ウミトサカ

ウミハネウチハ

海ヒバ

◎ウミマツ 珊瑚類

ウミヤナギ

大金ヤギ

オベリア

オベリア・ゲニクラタ

クダサンゴ 珊瑚類 海産

サクラヤギ

○シロクラゲ（ミツクラゲ、ヨツメクラゲ、モチクラゲ、ユフレ

クラゲ）水母類

ソデカブト

人類マラリア蟲

ツエツエフライス

○ヒドラ  
 ヒドラクチニア  
 ビピンナリア  
 ミレボラ  
 桃色珊瑚  
 ヤナギウミエラ  
 レプトメヂューサ  
 ロプスター

このリストの特徴として、まず一つ目は玉名郡誌なのに玉名に生息していない生物まで何故か大量にはいつている点がある。むしろ玉名に生息していない生物が幅を占めている。人類マラリア蟲やツェツェフライス (Tsetse fly, ツェツェ蠅・吸血性でアフリカ睡眠病を起こす。アフリカに分布) に至っては何故入っているのかも分からない。ロプスター (lobster) も英語のままであるしそもそも北大西洋産である。おかげでリストはやたらと長く、解説も無いのに一二三ページ (昭和六一年 (一九八六) 復刻版) にもわたる。

二つ目の特徴として木下熊雄が専門としていた刺胞動物 (Coelenterate) についてかなり詳しく記述している点である。

オベリア、オベリア・ゲニクラタ、ヒドラクチニア、ビピンナリア、ミレボラ、レプトメヂューサはラテン語名で、それぞれ *Oberia* (オベリア属のヒドロ虫)、*Oberia geniculata* (オベリア属の中の一つ)、*Hydractinia* (海産ヒドロ虫)、*Bipinnaria* (ヒトデ類の浮遊型幼生)、*millepora* (ヒドロサンゴ類)、*Leptomedusae* (ヒドロクラゲ) である。このヒドロ虫類というのは昭和天皇が御研究されていた海産生物である。

ウミハネウチハ、海ヒバ、大金ヤギ (一九〇七) やサクラヤギ、ソデカブト、は木下熊雄が東京帝国大学在学中に研究し、記載命名した深海・冷水域八放サンゴの新種や、熊雄による新和名の種であり、分布が相模湾以北のみである北方種なども含んでいる。当時日本国内で同様の研究をしている人間は存在しなかったうえ、あえてこれらを入れている人物は木下熊雄しか考えられない。参考にした「熊本県玉名郡誌」は特にこの項目の著者が記載されていない。もちろん本人が直接このリストを作製したのではない可能性もあるが、まったくかわっていないと言いきることは難しい程、あまりにも専門的すぎる内容と言える。今後の確認が必要である。

木下熊雄を初めとする明治の木下家の学問・研究に進んだ人々の世界を常に視野に入れつつ、軽々しく周りに左右されない、と

いう科学者のあるべき姿の背景は、このような複合的で必然的なものであった。その前の世代の初太郎や助之は時代的に研究を職業にするわけではなく、その研究を社会の為に生かすという非常に人間的な（また実学的な）ものであった。しかし彼らにとっても、おそらく、彗星の観察や氷の観察、寒暖計の観察などはそういう社会に還元されるようなものではなく、単なる一個人の純粋な学問に關しての知的喜びの為であっただろう。そのことを念頭に置くと、木下熊雄の言う「自分は大学教授などには断じてならないぞ」という言葉は決して傲慢なものではなく、むしろ学問をするうえで非常に誇りを持って言われた言葉であると感ぜられてくる。そして、木下熊雄の背景の、伊倉という元国際貿易港の立地というグローバル性、幕末から明治にかけての外国勢との攻防と西洋の文化の取り入れという時代的なグローバル性、そして何よりも身近な木下家の人々という人物的なグローバル性を合わせると、木下熊雄が、同時代の科学者たちの論文での数字の桁数に對して「西洋人がやたらと細かい桁まで出しているのを見て、何も考えずに同じ桁まで出さないと怖いと思っているのは、単に夷萩に盲従しているだけである」（木下一九〇九）と批判している言葉の内容が、より深い意味を持って現れてくるだろう。

## 謝辞

本報所収の研究にあたって、玉名市歴史博物館ころピアにて貴重な木下家の文書を直接調査させていただいたことに深く御礼を申し上げます。現地での案内および様々なセッティングをして下さった玉名市市議松本重美氏、玉名市歴史博物館ころピアの館長牧野吉秀氏、村上晶子氏、高田智華氏に感謝致します。また木下家菩提寺の光専寺にて木下家についての様々な情報をお話し下さった熊本大学名誉教授・吉田正憲氏、木下熊雄の甥である国助氏の御長女にあたられる吉田冨子氏、光専寺前坊守・高木久美子氏にも深く感謝致します。また伊倉町小学校での講演はとても嬉しいものでありました。調査にかかわった全ての方に御礼申し上げます。

## 引用文献（アルファベット順）

- 井澤蟠龍 一七〇九「肥後地誌略（抄）」『玉名市史 資料編2 地誌』p. 137-150 玉名市資料編集委員会編 玉名市 一九九二 pp. 647
- 石井謙治 一九九五「和船II」ものと人間の文化史 法政大学出版社 pp. 300
- 石原幸男 一九九七「肥後同田貫について」企画展「郷土の刀剣・同田貫」玉名市立歴史博物館ころピア 有明印刷 pp. 16
- 犬童美子 二〇〇〇「木下家の一五〇年」くまもとの女性史資料編、くまもと女性史研究会、熊本日日新聞情報文化センター
- 宇野廉太郎 一九五一「肥後同田貫剣工の遺跡」『日本談義』復活13号（昭和二十六年二月号）
- 岡田章雄 一九六八「5朱印船と海外貿易」著者代表 須藤利一「ものと人間の文化史 1船」法政大学出版社 pp. 353

- 木下熊雄 一九〇九「動物の大きさの記載に付て」動物学雑誌 (Zoöl. Mag.) 21 (249): 284-288
- 木下順二 一九八二「本郷」講談社
- 木下順二氏寄贈木下家文書 家関係資料1-1 「菊池木下家系譜」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 家関係資料1-2 「玉名木下家世系」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 家関係資料1-3 「合志系譜」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 家関係資料3 木下助之九「家記 先祖菊池郡刀工延寿家以来の由緒」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 家関係資料4 「口上之覚(木下徳太郎婿養子願)」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 草稿21 「方今之時勢ニ付御内意之覚(在中帯刀以上の者 組合を立てケール筒 打方修練いたす事)」玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 木下順二氏寄贈木下家文書 書簡50 玉名市立歴史博物館ころピア所蔵
- 熊本県玉名郡誌一九二三 初版昭和六一年復刻版熊本県教育会玉名郡支会編纂 臨川書店 一九八六 pp. 366
- 古賀勝次郎 二〇〇八「松崎懺堂・木下韃村・岡松夔谷―安井息軒と肥後の儒者たち」早稲田大学日本地域文化研究所編日本地域文化ライブラリー3 「肥後の歴史と文化」古賀勝次郎編者代表 行人社 東京 pp. 310 p. 49-80
- 三陸河北新報社 二〇一一年九月三日「八三歳、船大工の腕健在」
- 司馬遼太郎 一九七八「陸奥のみち 肥薩のみちほか」街道をゆく3 朝日新聞社 pp. 292
- 城後尚年 二〇〇五「第一節 玉名郡の諸手永と惣庄屋」玉名市史通史 篇上巻第五編近世第五章玉名郡の手永と村 玉名市立歴史博物館ころピア編 玉名市
- 杉岳志 二〇〇五「書籍とフォークロア…近世の人々の彗星観をめぐって」一橋論叢、一三四(四): 七三-七四
- 高瀬湊関係施設目録 一九八七 玉名市歴史資料集成 第一集「高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)」一九八七 昭和六二年 玉名市役所・秘書企画課編集・発行 pp. 162
- 田邊哲夫 一九九七企画展「郷土の刀剣・同田貫」こあいさつ、玉名市立歴史博物館ころピア 有明印刷 pp. 16
- 玉名郡是 一九〇三「玉名市史 資料編2 地誌」p. 425-609 玉名市資料編集委員会編 玉名市 一九九二 pp. 647
- 玉名市史 資料編2 地誌 一九九二 玉名市資料編集委員会編 玉名市 pp. 647
- 玉名市史 資料篇5 古文書 一九九三 玉名市資料編集委員会編 玉名市
- 玉名市立歴史博物館ころピア開館記念「木下順二展」一九九五 玉名市立歴史博物館ころピア pp. 43
- 玉名市立歴史博物館ころピア企画展「郷土の刀剣・同田貫」一九九七 有明印刷 pp. 16
- 玉名市立歴史博物館ころピア企画展「朱印船貿易と肥後」一九九九 有明印刷 pp. 24
- 玉名市立歴史博物館ころピア企画展「同田貫II―歴史に名を連ねる豪

- 刀一」1100四 有明印刷 pp. 24
- 玉名市立歴史博物館「ころびア企画展「同田貫一豪刀と幻の銃」」1100五 有明印刷 pp. 20
- 玉名市立歴史博物館「ころびア資料集成 第二集「木下順二氏寄贈 木下家文書目録」」199九 玉名市立歴史博物館「ころびア」 pp. 60
- 玉名市立歴史博物館「ころびア資料集成 第四集「木下助之日記（一）」」1100一 玉名市歴史博物館「ころびア」 有明出版 pp. 84
- 玉名市立歴史博物館「ころびア資料集成 第五集「木下助之日記（二）」」1100八 玉名市歴史博物館「ころびア資料集成第六集 玉名民報印刷 pp. 75
- 玉名市立歴史博物館「ころびア資料集成 第五集「伊倉城址—伊倉城址範囲確認調査報告」」1100二 玉名市立歴史博物館「ころびア」 pp. 260
- 玉名市歴史資料集成 第三集「高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）」198八 玉名市役所・秘書企画課 編集・発行 pp. 154
- 玉名市歴史資料集成 第五集「高瀬湊関係歴史資料調査報告書（二）」—刻石文篇—」198八 玉名市役所・秘書企画課 編集・発行 pp. 108
- 玉名市歴史資料集成 第六集「菊池川下流域遺跡跡詳細分布調査報告書（一）」198九 玉名市市長公室 秘書企画課編集・発行 pp. 84
- 玉名市歴史資料集成 第八集 菊池川下流域遺跡詳細分布調査報告書（二） 菊池川下流域遺跡詳細分布図 玉名市 図2 199一 玉名市役所秘書企画課編集・発行
- 寺本直廉 一七八四「古今肥後見聞雜記（抄）」（別称 寺本直廉覚書 一巻 天明四（一七八四）年）「玉名市史 資料編2 地誌」p. 210-
- 211 玉名市資料編集委員会編 玉名市 1991 pp. 647
- 成瀬久敬 一七二八「享保一三年 新編 肥後国志草稿（抄）」「玉名市史 資料編2 地誌」p. 151-209 玉名市資料編集委員会編 玉名市 1991 pp. 647
- 肥後国玉名郡誌（浄書本）（「玉名郡誌下調」（稿本） 一八八二）（「玉名市史 資料編2 地誌」p. 223-258 玉名市資料編集委員会編 玉名市 1991 pp. 647）
- 松本寿三郎 1988a 「（一）玉名地方の舟着場と浦々船数—肥後国絵図・道帳・有物帳から—」p. 128-131 「二」資料」玉名市歴史資料集成 第二集「高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）」1988 昭和六三年 玉名市役所・秘書企画課 編集・発行 pp. 154
- 松本寿三郎 1988b 「（二）肥後国中之絵図（正保国絵図）」p. 131-134 「三」資料」玉名市歴史資料集成 第三集「高瀬湊関係歴史資料調査報告書（二）」1988 昭和六三年 玉名市役所・秘書企画課編集・発行 pp. 154
- 松本寿三郎 2001 「明治の西洋動物学の黎明—木下熊雄」比較文明研究（JCSO）16：1011-1119
- 松本寿三郎 1991 「玉名郡諸手永鑑類 解題」p. 113-115 「玉名市史 資料編2 地誌」玉名市資料編集委員会編 玉名市 1991 pp. 647
- 襄田勝彦 1100五「同田貫刀鍛冶による鉄砲の製造」企画展「同田貫—豪刀と幻の銃」平成一七年 玉名市立歴史博物館「ころびア」p. 17-

- 森山恒雄&村上晶子 二〇〇五「一 高瀬・伊倉町の構造と機能」玉名  
市史通史篇上巻第五編近世第一章第二節加藤清正の支配 玉名市立歴  
史博物館ころピア編 玉名市  
吉田荘一郎 二〇〇五「二 伊倉町」玉名市史通史篇上巻第五編近世第  
四章高瀬町の展開と高瀬御蔵 玉名市立歴史博物館ころピア編 玉  
名市